

【香月泰男

絵画シリーズ】

「ナホトカの船待収容所の側溝の中で、幾夜か絵具箱を枕にして寝た。

わずかしかなかった絵の具でも、もうすぐ絵が描けると思うと露の降りるのも苦にはならなかった。」

絵具箱の蓋裏には漢字が書いてある。

葬・月・憩・葉・飛・風・雨・伐・道・鋸・陽・朝の12文字で、帰国後は大陸での体験を記憶の底から掘りおこすうえで大きな役割を演じたと考えられる。シベリヤ・シリーズの母胎ともなったこの『絵具箱』そのものをモチーフにした作品です。

(写真提供 朝日新聞社西部本社)



題名「絵具箱」 1972年制作 (山口県立美術館蔵)

画家の『原体験』と家族愛

実際四年生までは優等生といてもよい成績だが、五年、六年と進級するにしたがって、成績は悪くなり、中でも操行（ふだんのおこない。態度）の成績が悪く、唱歌と図工はいつも変わらず甲（優秀）だったのです。後に延べますが、東京美術学校での藤島教室の中で操行の悪さと言うか、自分の絵かきとしての生き方というものがはっきりと出ています。

小学生の頃、三隅の文具屋にある6色クレヨンに満足できず、八キロメートルも離れた当時正明市（現長門市）の文具屋まで、むすびを持って、ゾウリをはき、往復五時間もかけ12色のクレヨンを手に入れた日の興奮や、祖父の財布からお金を抜きとり、水彩絵具を買い求めて納屋の中で描いていたところを糾問されたことも昨日のように書かれています。

「結局祖父の財布から盗んだことを白状せざるをえなかった。そして祖父は猫の子でもつかむように私のえりをつか

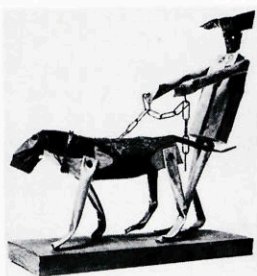
むと庭先まで引きずっていった。そこに私を立たせておいて、奥の部屋から伝来の日本刀を持ち出してきた。なにをされるのだろうか。一瞬恐怖で顔から血の気が失せるのがわかった。『おまえのような奴はこうしてくれる。』祖父は鞘ごと振りかざした日本刀を頭に肩に打ち下した。私はそれをよけようともせず受けた。『どうして、欲しいなら欲しいといわん。買ってくれといわん。』打ちながら叱る祖父の声に、どこか口惜しそうな響きがあった。祖父のいう通り、買ってくれと言えればよかったのだ。しかし、その言葉が出なかった。確かに私はひねくれた子供だった。素直でなかった。ただ甘えるとか、頼みごとをするとかが極度にいやだった。自分が愛されていることへの確信がなかったからかも知れない。父も母も生きているというのに、自分の手の届くところにいなかった。

両親が死んでひとりぼっちというのなら、かえってもっと素直になれたかも知れない。いつも自分が見棄てられた存在であると意識がついてまわっていたのだ。

私の救いになっていたのは、ただ絵を描くことだけだった。

（私のシベリヤより）「そして私は天啓的に、将来きっと画家になることを予感した。幼い私は、運命との不意の出会いにふるえた」（朝日新聞）と書いてあります。

先生の画業と生涯をふり返るとき、愛情に飢えた孤独な少年の日々と、画家へのあこがれは、後年の先生の独立不羈の精神と一途な家族愛の「原体験」とも呼べる大切な意味となるがゆえあえて詳しく延べたものです。



おもちゃ<人物>

そして身をもちくずしていく我子貞雄への思いが、当時村長を務めていた祖父（春齡）のきびしい躰になったのでしよう。この躰が後に北海道の倶知安で教師を三年半務めるのですが、この間にあれほど自分にはふるさとはない、自分が必要としてくれる人はいないと思っていたのに、祖父の愛、そしてふるさと山口、三隅の温かさに気がつくのです。

（次頁へ）